QOL 研究３年間のまとめ
―自分らしく成長する学び―

令和５年度

東京都立府中けやきの森学園

表紙：肢体不自由教育部門　高等部　３年　西山 快人
（視線入力で描きました）

まえがき

校長　相賀　直

本校の QOL 研究３年間のまとめができあがりました。

３年間取り組んでこられた先生方に感謝いたします。

この QOL 研究は、私の前任の堀内省剛校長先生が提唱し、令和３年度から始められたものです。QOL とは生活の質のことで、WHO（世界保健機関）の定義では、「一個人が生活する文化や価値観の中で、目標や期待、基準、関心に関連した自分自身の人生の状況に対する認識」とされており、「身体的側面」、「精神（心理）的側面」、「社会的側面」、「文化（環境）的側面」から評価されます。QOL は中立的な言葉ですが、一人一人の子供に焦点を当て、その子供なりの QOL を向上させることを考えたときに、「自分らしく成長することができる」ようにするということばが生まれました。それを本校の教員が共有し、本校の教育の中心に据えて研究を進めてきました。

私は、令和５年度から本校に着任しましたが、令和４年度末に業務引継ぎで初めて来校した際に、堀内校長先生から、この QOL 研究の内容と意義について説明を受けたとき、「自分らしく成長することができる」を追究することが、本校の２部門ある障害種別、小学部から高等部までの年齢の幅、さまざまな障害の状態の子供たちすべての成長を促すことにつながるという話を聞いて、とても分かりやすく、教員のみならず、子供、保護者とも共有できるテーマであると感じ、わが意を得たりと思いました。

さらに、「自分らしく成長するための学びの実現」に向けた手立てとして、東京型教育モデルの３つの学び、すなわち「意欲を引き出す学び」、「社会全体に支えられた学び」、「ICT を活用した学び」をキーワードとして研究を進めてきました。これらのキーワードを手掛かりに授業改善、地域社会との連携、ICT の活用など具体的な教育活動・研究活動につなげてきました。学部ごとのテーマに沿って、毎月１回の研究の日に話し合い、夏の全校研究会は全員参加型で、お互いに発表を行い、聞き合いました。教員も主体的に本研究に関わってこられたことが素晴らしいと思います。

次年度からは、「ウェルビーイングを目指したカリキュラム・マネジメント」を全校の研究テーマとして、今年度までの QOL の向上も引き継ぎ、将来社会の中で生きていく児童・生徒の姿をイメージしながら、授業の改善・充実を図り、児童・生徒たちとともに、次のステージへ上っていきたいと考えています。

目次

第１章　学校全体での取組

Ⅰ　QOL 研究３年間の歩みについて　・・・・・・・　1

Ⅱ　教育課程の改善について　・・・・・・・　2

1　知る・考える・実感する「学校教育目標の改訂」　・・・・・・・　3

2　授業に取り入れる「学校の教育目標を達成するための基本方針のブラッシュアップ」　・・・・・・・　6

3　授業で深める「指導の重点のブラッシュアップ」　・・・・・・・　11

4　まとめ　・・・・・・・　13

第２章　学部での取組

Ⅰ　学校教育目標達成に向けた授業づくり・授業改善のポイント　・・・・・・・　14

1　Ａ部門　自立活動を主とする教育課程　研究グループ　・・・・・・・　16

2　Ａ部門　知的代替の教育課程　研究グループ　・・・・・・・　18

3　Ａ部門　準ずる教育課程　研究グループ　・・・・・・・　20

4　Ｂ部門　小学部　研究グループ　・・・・・・・　22

5　Ｂ部門　中学部　研究グループ　・・・・・・・　24

6　Ｂ部門　高等部　研究グループ　・・・・・・・　26

Ⅱ　資料　・・・・・・・　28

Ⅲ　引用・参考文献　・・・・・・・　32

（Ａ部門：肢体不自由教育部門　　Ｂ部門：知的障害教育部門）

第１章

学校全体での取組について

Ⅰ　ＱＯＬ研究の３年間の歩みについて

府中けやきの森学園（以下、本校）における学校研究は、日々の授業実践を「教育課程の改善へ」反映し、教育課程の改善から授業実践をさらに深化させるよう推進している。

ＱＯＬ研究	教育課程の改善
▶知る・考える・実感する	▶学校の教育目標の改訂
▶授業に取り入れる	▶学校の教育目標を達成するための基本方針のブラッシュアップ
▶授業で深める	▶指導の重点のブラッシュアップ

Ⅱ　教育課程の改善について

令和５年度都立特別支援学校教育課程編成の基本方針には、教育課程について「学校において編成する教育課程は、学校教育の目的や目標を達成するために、教育基本法や学校教育法をはじめとする教育課程に関する法令に従い、各教科、特別の教科である道徳、外国語活動、総合的な学習の時間（高等部においては総合的な探究の時間）、特別活動及び自立活動についてそれらの目標や内容を実現するよう教育の内容を学年に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した各学校の教育計画である」と示されている。

本校では、この「教育計画」に、学校研究の成果を反映できるよう、計画的に進めている（図表１）。

図表１　教育課程と QOL 研究との関連

教育課程について（届）の項目	QOL 研究との関連
１教育目標	
(1)学校の教育目標	１年目：学校教育目標の改訂
(2)学校の教育目標を達成するための基本方針	２年目：基本方針の見直し
２指導の重点	
(1)各教科、道徳科、外国語活動、統合的な学習の時間、特別活動、自立活動、各教科等を合わせた指導の重点 (2)生活指導の重点 (3)進路指導の重点	３年目：指導の重点のブラッシュアップ
３教育目標達成のための特色ある教育活動・その他の配慮事項 (1)特色ある教育活動 (2)その他の配慮事項	
４年間授業日数配当表等	
５年間行事計画	

1　▶知る・考える・実感する　　▶学校の教育目標の改訂

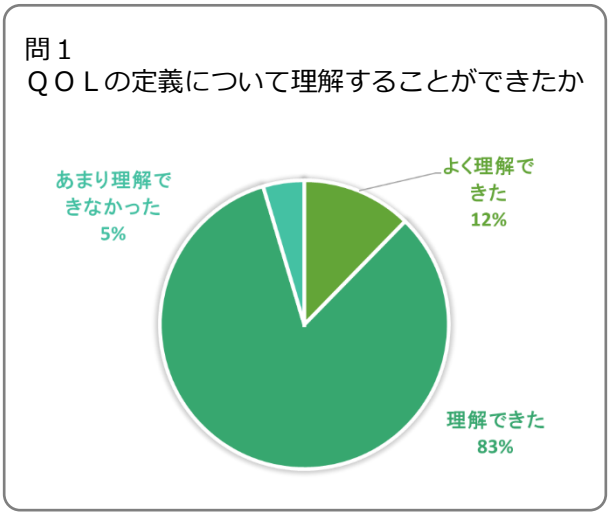
本校で、研究を推進する際に大切にしていることは、学校組織全体で、その意義を理解し推進することである。そのため、ＱＯＬ研究を導入した１年目は、「ＱＯＬの向上とは？」について、教職員一人一人が考え、ＱＯＬについて「知る・考える・実感する」ことから始めた。

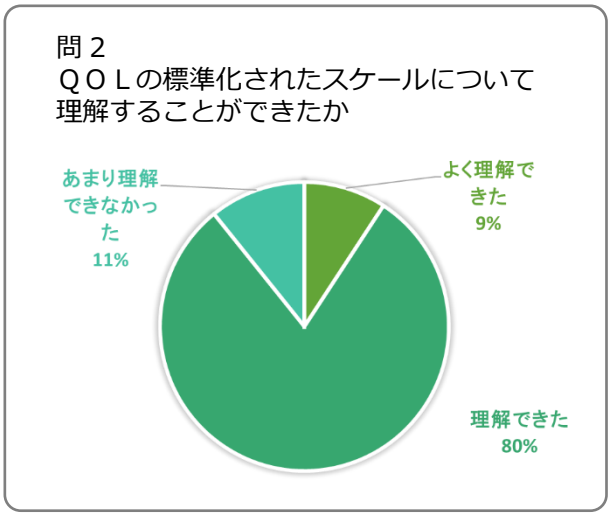
（１）ＱＯＬ研究　「ＱＯＬに関する研修会の実施」

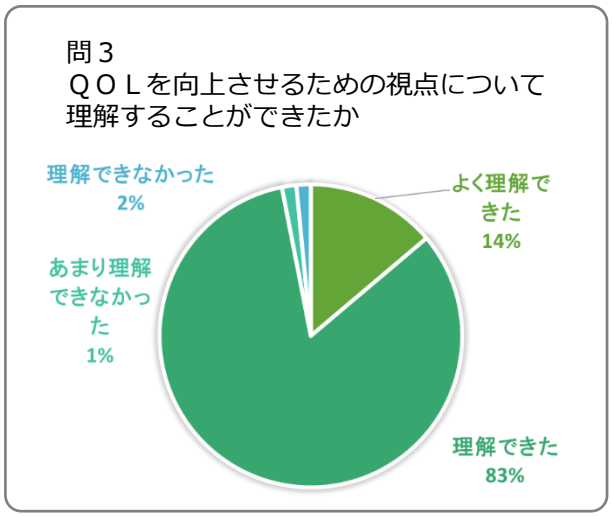
①テーマ　ＱＯＬについて～ＱＯＬに関する研究活動のスタートに向けて～

②講師　東京都立南大沢学園　指導教諭　伊藤佳子氏

③研修会後のアンケート結果（n=65）







図表２　研修会後のアンケート結果

図表３　研修会後のアンケート「問４ＱＯＬ研究を全教職員で深めるための具体的な提案」より

４　QOL 研究を全教職員で深めるための具体的な提案　　一部抜粋
・教員自身が自分の QOL をあげられるように意識すること。
・日本の文化的・社会的背景を加味しながら自分自身の QOL について考えてみて、QOL に関する客観的な視点や行動指標など具体的なイメージをもって理解を深めていく。
・児童・生徒だけでなく教職員の QOL についても、同時に考えるようにすると主体的に考えやすいのでは。
・学校生活における身近な QOL を探すところから始めるなど。
・QOL の向上についての感じ方は人それぞれ違うため、まずは自己理解を深められるような取り組みを行う。今回の研修のように、自分の生活や考え方を振り返るような機会があると良いと思う。
・まずは意識することを目標⇒日常的に「ＱＯＬ」の文字を目にする機会を設ける。 （ex：週一回、掲示板で項目の一つを掲げる…睡眠は満足のいくものですか…）
・QOL の向上は教育の分野だけでなく、医療や福祉の分野でも重要な考え方だと思います。多職種のお話も聞くことができる機会があればうれしいです。

４のすべての記述から抽出したキーワード一覧　（キーワード数）					
教職員自身の QOL から理解していく	12	QOL についての理解の促進のための教職員の話し合いや研修会の実施等	6	児童・生徒のケース会の実施	5
卒業生調査	4	児童・生徒に標準化されたスケールの実施	3	児童・生徒の実態に合わせたスケールの開発	3
先行研究	3	学部目標との関連性	2	授業検討	2
学校全体の取組として実施	2	意思の表出が難しい場合の対応	2	キャリア教育との関連性	2
児童・生徒の QOL を向上させるための視点	2	児童・生徒が選択肢を理解できる工夫	1	個々の感じ方の違いへの配慮	1
児童・生徒のニーズに把握	1	QOL 向上のための指導の中核つくり	1	QOL に関する行動指針	1
QOL に関する客観的な視点	1	指導計画と QOL 向上の関連性	1	QOL の評価方法	1
学校生活における身近な QOL から考える	1	学部研究との関連性	1	日常的な意識化のための工夫	1
自己理解を深める取組	1	生活全般で QOL を意識化	1	４S	1
個人内評価	1	支援方法の検討	1		

（２）学校の教育課程の改善　「教育目標の改訂」

教育課程の反映に関しては、ＱＯＬ向上の視点（ＷＨＯ）、子供の権利条約、障害者権利条約等や学習指導要領、教育関連法規、東京都教育施策大綱等から全教職員で再検討し、学校の教育目標の改訂を実施した。

①改訂前の学校の教育目標

・基本的生活習慣を養い、健康で豊かな心と身体を養う。
・豊かな感性と、自分を表現する力を育てる。
・主体的に学び働く意欲を高め、自立し、社会参加できる力を育てる。
・仲間を大切にし、共に活動する力を育てる。

②改訂後の学校の教育目標

前文

児童・生徒を一人格として尊重しながら、障害の特性等に応じた専門的な教育を充実させ、豊かな人間性や社会性を育み、自立し社会参加できる児童・生徒を育成する。そのために、次に掲げる目標の達成に努める。

・健康、安全で幸福な生活のために必要な習慣を養う。
・自ら学び、自ら考え、主体的に行動しようとする意欲や態度を養う。
・学習上又は生活上の困難を改善・克服し自立するために必要な知識、技能及び態度を養う。
・豊かな情操と道徳心を培い、多様な人々が共に生きる社会の一員としての資質を養う。
・個性の確立に努めるとともに、進んで自立・社会参加する意欲や態度を養う。

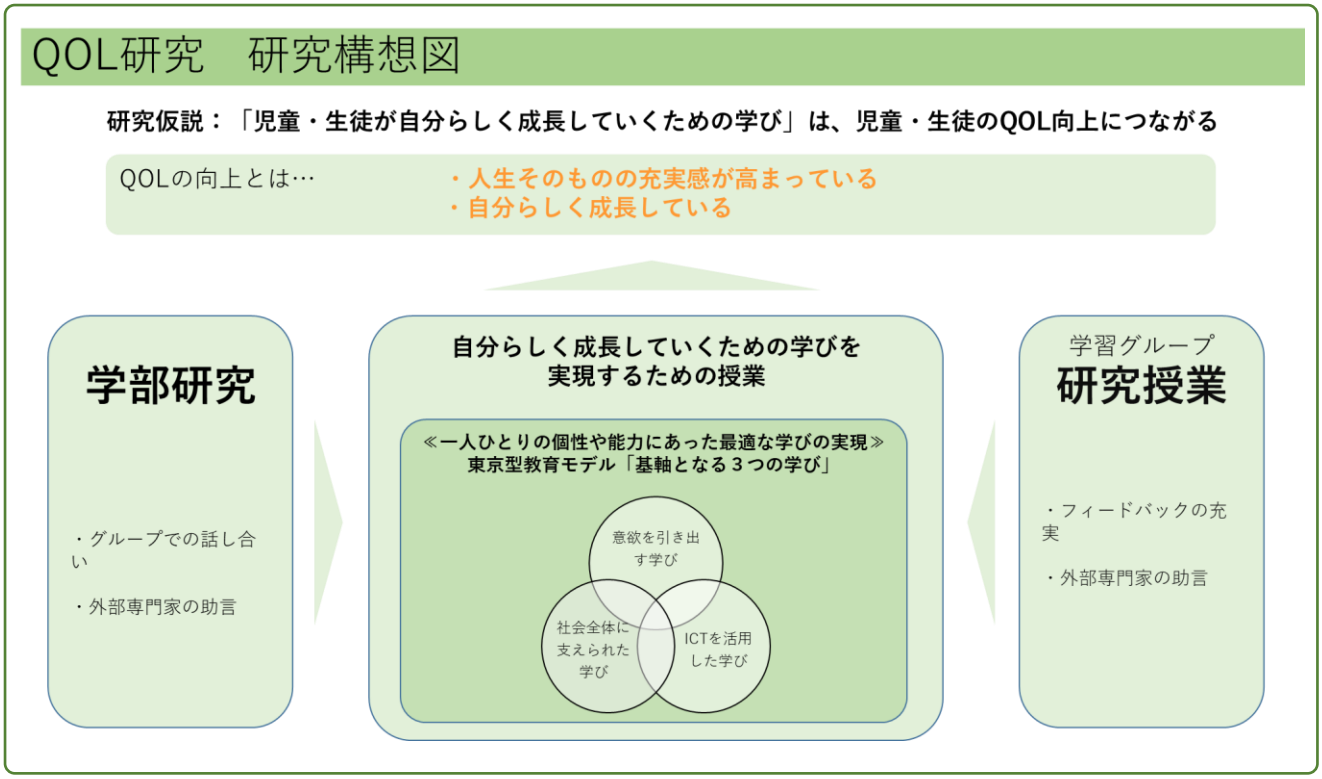
2　▶授業に取り入れる

▶学校の教育目標を達成するための基本方針のブラッシュアップ

（１）ＱＯＬ研究　「授業に取り入れる（研究仮説の設定）」

研究仮説を「児童・生徒が自分らしく成長していくための学びは、児童・生徒のＱＯＬ向上につながる」と設定した。その際には、ＱＯＬの向上とは、「人生そのものの充実感が高まっている」「自分らしく成長している」状態と定義し進めた。手立てとしては、東京型教育モデルの基軸となる３つの学び「意欲を引き出す学び」「社会全体に支えられた学び」「ＩＣＴを活用した学び」を取り入れ実践した。

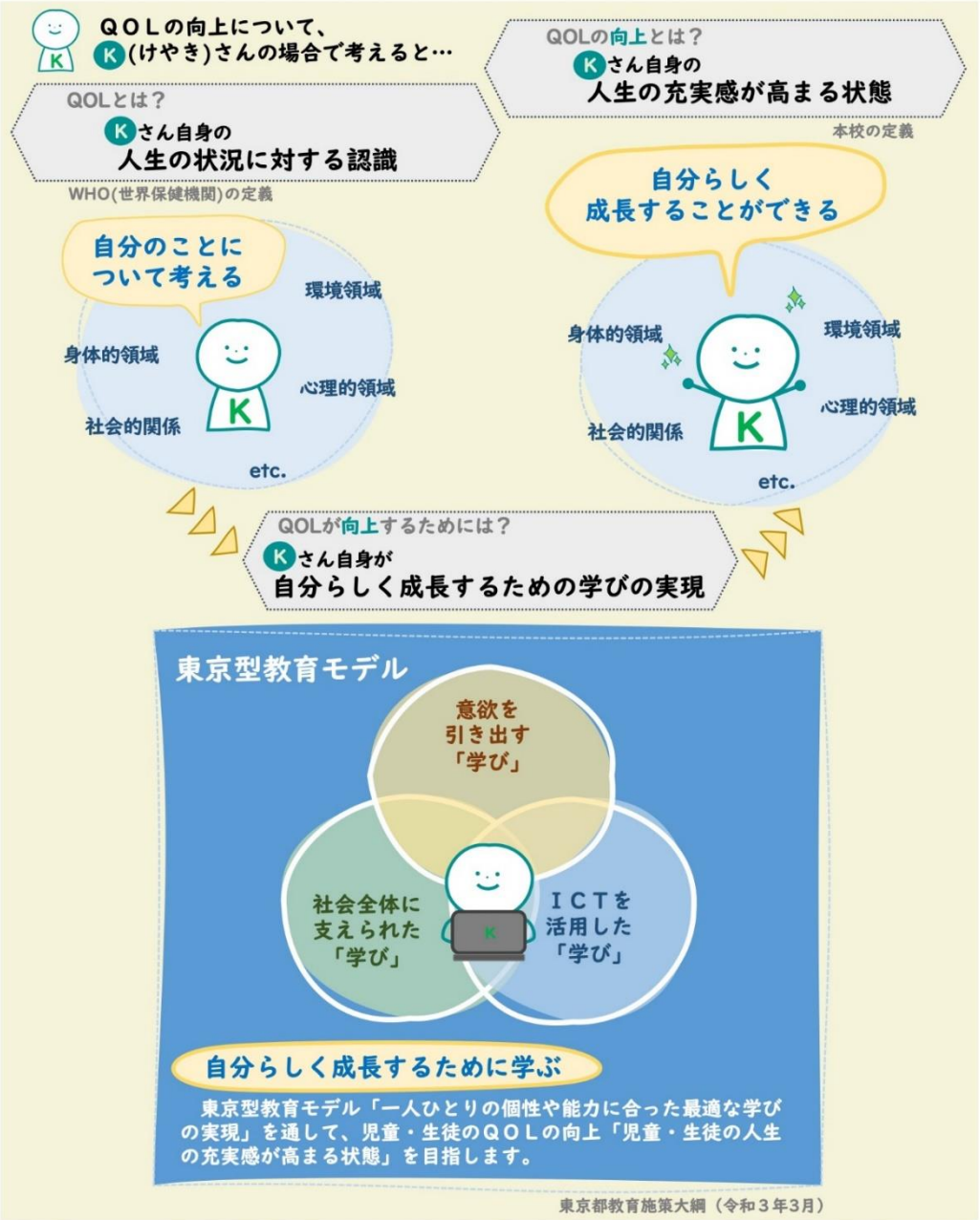
図表４　ＱＯＬ研究の研究構想図



資料１　令和４年４月発行　学校だより第２号　「ＱＯＬ研究について」より

児童・生徒のＱＯＬ（生活の質）の向上を目指して

本校では、令和３年度より「児童・生徒のＱＯＬの向上」を目指して研究を進めています。令和４年度も継続して、授業実践を通して「児童・生徒のＱＯＬの向上」に取り組みます。



コラム<QOL（生活の質）の向上とQOL研究のつながり>

QOLの向上とは、「日常生活や社会生活のあり方を自らの意思で決定し、生活の目標や生活様式を選択できることであり、本人が身体的・精神的・社会的・文化的に満足できる豊かな生活」と定義されています［2000,厚生省(現厚生労働省)］。

東京都教育委員会においても、キャリア教育の説明の中で、「児童・生徒本人の意思や思い」により重点をおき、「できた・できない」だけでなく、「○○までがんばった」「もう少しでできそう」「助けをもらってできた」など、肯定的に捉えられるようにすることが記されています(*1)。 このように、「QOL（生活の質）」には、本人の意思や思いがとても大切です。そのために、本校の教職員は、児童・ 生徒の実態に応じて対話的に関わり、どのような手立てや関わりが「児童・生徒のQOLの向上」につながったのかを、授業実践を通して明らかにしていくQOL研究に取り組みます。

(*1)東京都教育委員会,2021,自分らしい生き方の実現を目指して

（２）ＱＯＬ研究　「授業に取り入れる（授業実践）」

資料２　令和４年１１月発行　学校だより　第９号「ＱＯＬ研究について」より

ＱＯＬ研究

ＱＯＬ（生活の質）の向上について、教員向け研修会、生徒向け出前授業を実施しながら、「児童・生徒自身がＱＯＬを知る、考えること」と「どのように日々の実践で取り組んでいくか」について、３つのＳＴＥＰで検討しながら進めています。

御家庭におきましても、ＱＯＬについての気付きや、生活の中の嬉しさ・楽しさの発見がありましたら、ぜひ、担任と共有をお願い致します。

●ＳＴＥＰ１　知る・考える

ＱＯＬ（生活の質）を知る。自分のＱＯＬについて考える。

都立南大沢学園の伊藤佳子先生、片桐一樹先生を講師にお招きし、１０月３１日に、Ｂ高等部の生徒を対象に、ＱＯＬについて、知る・考えることを目標にした出前授業を実施していただきました。

ＱＯＬと聞くと、具体的なイメージがわきにくいので、自分の生活について、①食事、②睡眠、③勉強、④友達、⑤趣味、⑥通学、⑦健康、⑧情報の生徒の生活に身近な８項目に絞り、◎○△をつけながら考えました。

睡眠のところでは、今の睡眠リズムが乱れていると感じて、「以前のように整えていきたい」と振り返る生徒もいました。

●ＳＴＥＰ２　実践する

自分らしく成長するためには、何が必要かを考えて実践する。

夏季には、教職員向けのＱＯＬの研修を実施しました。その際には、児童・生徒のＱＯＬを向上するためには、どのようなことが必要かを検討しました。「児童・生徒の小さな達成感を大切にし、その目標を達成する嬉しさや楽しさを共有していく」そのような積み重ねから「児童・生徒の毎日が充実し、心身が満たされた生活」を目指すことができると考えました。

＜夏季ＱＯＬ研修後の教員の気付き（一部抜粋）＞

○児童・生徒の小さな達成感が、QOLを上げていくのではないかと感じました。私は目標を大きく設定してしまいがちでしたが、小さな目標を達成する嬉しさや楽しさを児童と共有していけるように考えを改めようと思いました。

○物質的な豊かさに 満たされた 生活 ではなく、「毎日が充実し、心身が満たされた生活」 に 焦点を当てた 概念という言葉に感銘を受けました。

○生徒のQOLが向上したと感じるときは、想像以上にたくさんありました。また、当たり前のことが当たり前であることでもQOLは向上するのだと思いました。

●ＳＴＥＰ３　振り返る

人生の充実感が高まる状態につながったかを、振り返る。

自分の生活について考える中で、新たな気付きが出てきて「△ちょっとうまくいっていない」と感じることがあります。でも、それは、生徒の世界の広がり、成長の過程と考えることもできます。なぜ、そう感じたのかの理由と合わせて、児童・生徒に寄り添いながら丁寧に考えていくことが必要になると考えます。

＜夏季ＱＯＬ研修後の教員の気付き（一部抜粋）＞

○数値が下がっていてもそれはQOLが下がったのではなく生徒の世界の広がりを意味する場合もあるなど、柔軟性や汎用性も含められておりその点大変に参考になりました。

○QOLの低下も成長の過程という話を聞き、納得しました。生徒のQOLを高めるために何ができるか、何をすべきか、今一度考える良い機会になりました。

（３）教育課程の改善　「学校の教育目標を達成するための基本方針(*1)のブラッシュアップ」

ＱＯＬの視点を取り入れた授業実践やその振り返りから、学校の教育目標を達成するための基本方針のブラッシュアップを実施した。基本方針については、児童・生徒、学部の実態に応じて設定するために、部門別、学部別に系統性をもって構成した。系統性やキーワードについては、今後も継続して検討する課題になっている。

図表５　基本方針キーワード一覧　[A:肢体不自由教育部門　B:知的障害教育部門（高等部）]

	小学部		中学部		高等部	
	A	B	A	B	A	B
Ⅰ　健康、安全で幸福な生活のために必要な習慣を養う。						
1 (1)	健康	ＱＯＬの向上	健康	基本的習慣	衛生管理、社会生活に必要な生活習慣の確立	健康管理、衛生管理
2 (2)	ＱＯＬの向上	基本的生活習慣の確立	自己を知る	身辺自立や心身の調和的発達	心身の安定	心身の安定
3	好きなことや得意なことを	健康な心身	好きなことや得意なことを	健康な心身		
Ⅱ　自ら学び、自ら考え、主体的に行動しようとする意欲や態度を養う。						
4 (3)	言語概念	安全	学習意欲、興味・関心	思考力・判断力・表現力やコミュニケーション能力	QOL の向上	自己効力感
5 (4)	意欲	コミュニケーション	主体的	興味・関心、他者と関わる力	主体的な学習	課題に向き合い、解決する
Ⅲ　学習上又は生活上の困難を改善・克服し自立するために必要な知識、技能及び態度を養う。						
6 (5)	主体的に学び続ける	自己効力感	多職種連携	多職種連携	進路希望	個に応じた指導の充実
7 (6)	自立活動	外部専門員	自立活動	自己肯定感	自立活動	自立活動
8 (7)	ＩＣＴ	ＩＣＴ	ＩＣＴ	ＩＣＴ	ICT	ＩCT
Ⅳ　豊かな情操と道徳心を培い、多様な人々が共に生きる社会の一員としての資質を養う。						
9 (8)	人権	見識	人権	社会の一員として	社会の一員、人権教育	安全教育、防災教育
１０ (9)	豊かな心	社会性	共に活動する力、人と関わる力	協働して活動する意欲	他者への共感	人権感覚
Ⅴ　個性の確立に努めるとともに、進んで自立・社会参加する意欲や態度を養う。						
１１ (10)	力を最大限に伸ばす	個に応じた指導	個に応じた指導の充実	目標や学習内容を個別に設定	自己理解	社会参加する意欲
１２ (11)	キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育	卒業後の生活への移行	卒業後の生活への移行
(12)					キャリア教育	キャリア教育

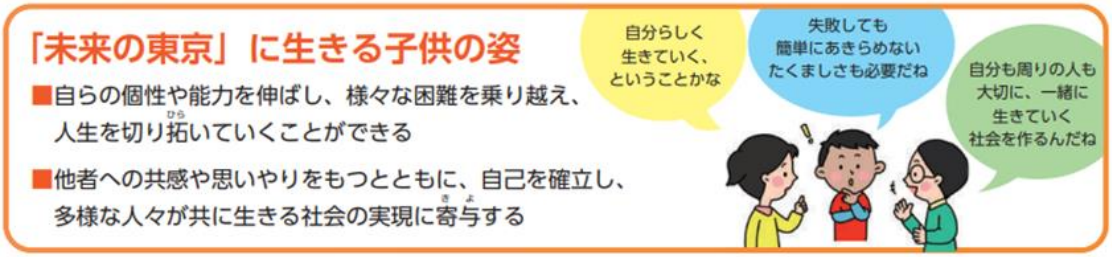
(*1)　都立特別支援学校教育課程届出　様式１　令和５年度教育課程について１教育目標(2)学校の教育目標を達成するための基本方針参照

資料３　令和５年１月発行　学校だより第１２号　「ＱＯＬ研究について」より

令和４年度も残り２ヶ月となりました。様々な面から御支援と御協力をいただき心から感謝申し上げます。今年度の児童・生徒のＱＯＬの向上を目指した取組について報告いたします。

■ＱＯＬの向上には、本人の意思や思いが重要

東京都教育施策大綱（令和３年３月）において、「未来の東京」に生きる子供の姿を以下のように示しています。イラストには、子供たちが「自分らしく生きていくことはどういうことかな？」と相談をしている姿が描かれています。



「自分らしく生きる」ことは、ＱＯＬ（生活の質）の視点からもとても重要になります。ＱＯＬは、「日常生活や社会生活のあり方を**自らの意思で決定**し、生活の目標や生活様式を**選択できる**ことであり、**本人が**身体的・精神的・社会的・文化的に満足できる豊かな生活」と定義されています（2000 ,厚生省）。本校では、**「自分らしく成長することが、人生の充実感の高まりにつながり、児童・生徒のＱＯＬが向上する」**と考え、「東京型教育モデル」の３つの学び「意欲を引き出す学び」「社会に支えられた学び」「ICTを活用した学び」を取り入れた教育を充実させるための研究を進めました。

■ＱＯＬ研究２年目の歩み（教員アンケートから一部抜粋）

□教員の気付きや学びの深化

●ＱＯＬの視点を取り入れて、実践を進めていくことに意義を感じている。自己効力感という観点で、児童・生徒の心と体の育ちを支援していくことが、自己研鑽につながると考える。
●研究で学んだことを授業に生かしていくことで、児童・生徒の成長につながると思うと、教材研究をしっかりしようという意気込みにつながる。
●選択の機会を設定する、児童・生徒が考える・感じる時間を設けることで、児童・生徒を理解しようとする意識が高まった。

□東京型教育モデルの視点を取り入れた授業改善

●児童・生徒が自分らしく成長できるように、キャリア教育の視点をもって自立活動の時間を捉えるようにした。児童・生徒が楽しみながら、安心感をもって取り組めるよう課題を設定したり、支援したりするよう心掛けた。児童・生徒が主体的に課題に向き合う姿が多くみられるようになった。
●児童・生徒が将来への希望をもって、主体的に学び、自分らしく成長していけることを目指して取り組んだ。その中でも、ＩＣＴを中心とした３つの学びを組み合わせた学習を意識して実践した。

□児童・生徒のＱＯＬの向上

●学習で場面を設定して使っていた言葉やサインが、日常生活でも児童が使えるようになった。好きなことを見つけたり得意なことを伸ばしたりすることで、遊びややりとりも広がっている。
●生徒が自分自身の力で「できること・できないこと」を整理することで、適切な目標を設定することができるようになった。また、1 日の生活をスケジューリングすることにより、自主的に活動することができるようになった。

ＱＯＬ研究２年目は、「自分らしく成長する学び」をイメージしたり理解したりするために、教員自身が「自分らしく成長するためには？」を考えることから始めました。それは、教員も実感を伴って、児童・生徒の自分らしく成長する学びを考えられるようにするためです。この取組から、「児童・生徒の自己効力感を高めるために、指導方法の改善をしたり教材研究の深化を図ったりすることでＱＯＬが向上することは、教員の喜びや成長にもつながる」という実感をもつことができました。このような気付きを通した授業力の向上を土台として、児童・生徒のＱＯＬの向上を目指した授業改善に取り組みました。上図に、たくさんある事例の中から、一部を抜粋して示しました。

今後も、御家庭と連携を深めながら、児童・生徒の「自分らしく成長する学び」を支えられるように、教員自身も授業力を向上する努力を続けてまいります。ぜひ、御家庭でのＱＯＬにつながるエピソード等も、担任へお知らせください。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

3　▶授業で深める　▶指導の重点のブラッシュアップ

（１）ＱＯＬ研究　「授業で深める」

３年目は、授業実践をさらに深化させていくために、各学部別の授業改善の取組のさらなる推進に取り組んだ。

資料４　令和５年１０月発行　東京都西部学校経営支援センターだより第９３号より

■府中けやきの森学園　―校内研究の充実　全員参加型の研究システム―

本校は、知的障害教育と肢体不自由教育の２部門、小中高の３学部がある大規模の特別支援学校です。そのため、校内研究を実施する場合は、教員の人数も約１００名と多く、下のような課題がありました。

課題

１　全教員で学びを共有しようとすると、研究対象となっている学習グループが、担当している児童・生徒の実態と合わない場合、学びの効果が薄れてしまう。
２　研究対象となった学習グループに、負担がかかる。

この課題を解決するために、４点の改善点をあげ、全員参加型の研究システムとして推進しました。

改善点

１　全学習グループを研究対象とし、年１回以上の研究授業を実施する。
２　毎月１回２５分研究会を積み重ねて、授業改善を進める。
３　外部専門家に、研究授業の助言や研究会の講師を依頼し、継続的に助言が受けられるようにする。
４　各学部の研究会の運営は、各学部の研究研修部が主体的に実施する。

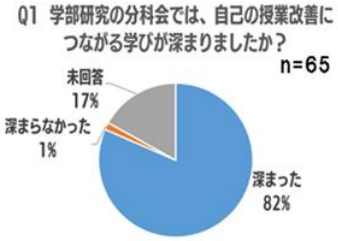
全員参加型の研究システム

１研究授業、２研究会、３外部専門家の活用の３つを毎月循環させながら、授業改善を進めています。

１．研究グループによる研究授業の実施	２．月１回２５分間研究会の実施	３．外部専門家の活用
知的障害教育27グループ、肢体不自由教育16グループが研究授業を実施し、改善に取り組んでいます。	授業につて課題を共有し、互いにアドバイスを出し合いながら改善を進めています。毎月の積み重ねを大切にしています。	外部専門家からの「研究授業への助言」と「全体への講義」を組み合わせて、専門的な知識を構築しながら実践につなげるように工夫しました。

まとめ

全員参加型の研究システムに取り組み、３年目になります。運営は、各学部の研究部が主体となり進めます。そのため、学部の課題にきめ細やかに対応できるようになりました。これらの改善が実り、今年度の夏季授業改善研究会後のアンケートでは、８２％の教員が「自己の授業改善につながる学びが深まった」と回答しました。今後も、創意工夫をしながら、教員の授業力の向上、児童・生徒のＱＯＬの向上を目指して取り組んでいきます。



（２）教育課程の改善　「指導の重点のブラッシュアップ」

①達成度が８０％以上の項目について

指導の重点に示された項目について、全教員が振り返りを行った。その中から、８０％以上達成できたと回答した教員が多かった項目について、各学部別に上位３項目を抜粋し、本校の教育課程の強みとして示した。

図表６　本校の教育課程の強みとして考えられる指導の重点のキーワード

	A　肢体不自由教育部門	B　知的障害教育部門
小	○主体的・対話的で深い学びの実現 ○実態に応じて基礎的な学力の向上 ○「できる（こと）」を大切にした授業づくり ○個別指導計画に基づく個に応じた指導の充実 ○準ずる教育課程の充実 ○外国語活動の充実 ・肢体不自由の特性に配慮した指導 ○児童の実態に合わせたクラブ活動の充実	○音楽の授業の充実 ・生活の中の音や音楽に興味や関心を広げる ○国語・算数の授業の充実 ・具体物の操作を通して概念形成を図っていく ・スモールステップで指導 ○熱中症予防運動指針を参考に、適切な予防措置
中	○各教科と自立活動の指導の連携 ○自立活動の充実 ・外部専門員の活用 ・生活用具や補装具、自助具等を工夫 ○日常生活の指導 ・基本的生活習慣の確立	○自閉症の情報処理過程の特性や対人関係やコミュニケーションの困難さに特別な配慮 ○認知学習、個別課題学習の充実、活動の構造化 ○自主的・自立的生活に必要な態度や習慣の育成 ○学校行事での感染対策や体調管理、安心・安全な実施 ○外部専門員と連携、的確な実態把握 ○日常生活や学習の基礎 ○計画的で組織的に個に応じて指導する ○安全教育の充実、全体計画及び年間指導計画を作成 ・避難訓練・防災訓練 ○作業学習の充実 ・中学部段階から将来の進路について意識
高	○宿泊を伴う学校行事の充実 ○作業学習の充実 ・職業生活の基盤となる力を伸長 ○教職員間で情報共有 ○保護者や関係機関と連携 ○支援が必要な生徒の早期発見・早期対応	○支援が必要な生徒の早期発見 ○教職員間で情報を共有 ○保護者と連携した取組 ○適性等を十分に考慮して進路指導 ○個人面談の活用と充実

②達成度が５９％以下の項目について

達成度が高かった内容と同様に、達成度が５９％以下の内容についても、各学部別に上位２～３項目を抜粋して示した。その結果、指定されるリーフレットや教材があるものや全体計画を示すものなどの達成度が低くなっていることがわかった。

教務分掌を中心に、全体計画、リーフレット、教材を常に確認できるようにして、全教員が活用できる環境を整える等の改善を実施していく。

2　まとめ

以上のように、ＱＯＬ研究の成果を教育課程の改善に反映できるよう推進してきた。このような、3 年間の取組の中で、教員の意識の変化がみられた。代表的な意見には以下のような内容があった。

- □ 児童・生徒にとって、本人の視点から考えた場合には、何が「人生の充実感につながるか」から、考えるようになった。
- □ 児童・生徒の行動も、その行動をする意味をとらえるようになった。
- □ 教科の学習において、「できるーできない」という二極化した評価ではなく、「児童・生徒の人生の充実感が高まる」という視点から、指導内容を組み立てるようになった。

次項から、そのような教員の意識の変化が授業へどのように反映され、児童・生徒のＱＯＬの向上に、どのようにつながったのかについて学部ごとにまとめた内容を示す。

第２章

学部での取組

Ⅰ　学校の教育目標達成に向けた授業づくり・授業改善のポイント

学校教育目標の達成に向けて、各学部でそれぞれの学部の課題に沿ったテーマを設定し、3か年の計画で研究を進めてきた。各学部のテーマを図表7に示す。

図表7　令和3年度から令和5年度　学部テーマと講師一覧

	年度	テーマ	講師		担当教員
A部門　自活主　研究グループ	令和3	重度・重複障害のある児童・生徒のための授業づくり	飯野 順子 平井 孝明	NPO法人地域ケアさぽーと研究所 理事長 平井こどもリハビリテーションサービス	田中 沙紀 土屋 香織
	令和4	児童・生徒一人一人の生活の質が向上する自立活動の指導について	飯野 順子	NPO法人地域ケアさぽーと研究所 理事長	堺 歩 田中 沙紀
	令和5	・自立活動「環境の把握」について工夫した授業づくり ～感覚へ働きかける授業つくりと、見通しのもちやすい環境の工夫～ ・意思表出につながる活動の工夫 ～児童・生徒の行動の読み取りと行動の解釈の推測と検証～	飯野 順子 椎名 久乃	NPO法人地域ケアさぽーと研究所 理事長 東京都立小平特別支援学校　指導教諭	堺 晴香 田中 沙紀
A部門　知的代替	令和3	児童・生徒の実態把握を的確な実施、実態に応じた教材や授業改善の推進	木村 順 上原 深音	療育塾ドリームタイム 作業療法士 株式会社チャレンジドジャパン ひゅーまにあ総合研修センター	田中 百合子 村田 百合
	令和4	生活や将来に必要な力を付けるための個別課題の設定について	松村 緑治 吉瀬 正則	外部専門員 教材教具アドバイザー	齊藤 建夫 山川 葉子
	令和5	児童・生徒に適した学習環境の工夫を通した授業改善 ～児童・生徒の実態に応じたICT機器や教材の活用、教師の関わり方の共有～	伊藤　靖 安斉　好子 上原　深音 縄岡　好晴	まなび工房 臨床発達心理士 公認心理師 株式会社チャレンジドジャパン　総合研修センター 明星大学人文学部福祉実践学科 準教授	飯坂　良樹 齊藤　健夫
A部門　準ずる	令和3	児童・生徒の得意なところを生かし、苦手なところに配慮する指導の工夫	木下 智子 金森 克浩	特別支援教育士SV 帝京大学 教授	山川 葉子
	令和4	ICTや支援ツールを活用した個別最適な教科指導の充実	金森 克浩	帝京大学 教授	大関 真由美 近藤 克之
	令和5	デジタル教科書・デジタル教材の活用を通した主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善	金森 克浩	帝京大学 教授	山川 葉子

B部門 小学部	令和３	児童の課題に応じた目標設定と確実に評価する授業づくり	安斉 好子	臨床発達心理士 公認心理師	田村 実穂 松島 宏樹 宮永 佐保里
	令和４	児童が困り感なく楽しみを共有できるための授業改善	安斉 好子	臨床発達心理士 公認心理師	上野 義昭 田村 実穂 松島 宏樹
	令和５	児童の「やりたい！」を引き出す授業の工夫と共有	安斉 好子	臨床発達心理士 公認心理師	上野 義昭 田村 実穂
B部門 中学部	令和３	生徒の課題に応じた授業づくり (国語と数学の授業を中心に)	安斉 好子	臨床発達心理士 公認心理師	横山 鮎子
	令和４	生徒が自分で考え、伝えることを目指す授業づくり	安斉 好子	臨床発達心理士 公認心理師	横山 鮎子
	令和５	生徒が自分で考え、伝えることを目指す授業づくり	安斉 好子	臨床発達心理士 公認心理師	磯山 亜紀子 横山 鮎子
B部門 高等部	令和３	行動問題がある生徒の協働的学び、及び社会参加に向けて	加藤 慎吾 齊藤 宇開	臨床発達心理士 たすく株式会社 代表取締役	宮阪 朱美 齋藤 州重 和久田 真由 磯山 亜紀子 剱持 敬太郎
	令和４	行動問題に配慮した指導の実践	齊藤 宇開	たすく株式会社 代表取締役	磯山 亜紀子 大谷 直紀 宮阪 朱美 中川 剛志 和久田 真由 及川 圭祐
	令和５	卒業後の生活を見据えた指導の実践	渡邊　倫	たすく株式会社 執行役員	和久田 真由 大谷 直紀 篠宮 誠 高須 綾子 緑川 由紀

1　Ａ部門　自立活動を主とする教育課程　研究グループ

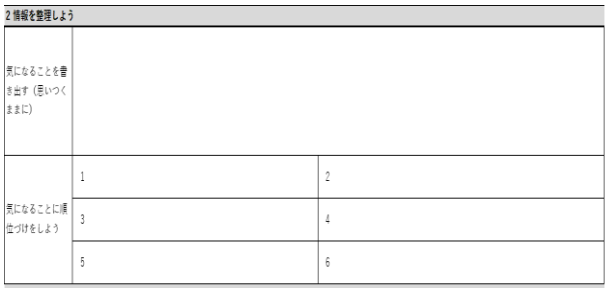
ポイント１　児童・生徒の実態把握		
	（背景）	授業改善に関する校内アンケートの結果から、児童・生徒の発達段階、既習事項を把握しながら指導することが課題に挙がった。
	（目標）	様々な視点から児童・生徒を捉えることができるように授業実践に取り組みながら、専門性の向上を図る。
	（手だて）	・自立活動の実態把握表の活用。 ・実態把握から目標設定、指導内容の設定手順の実施。

ポイント２　重度・重複障害のある児童・生徒のための授業づくり		
	（背景）	適切な実態把握を土台として、実態に基づく児童・生徒の課題を見極めることのできる学びを目指す。
	（目標）	ケーススタディを通して、実態把握の方法を学び指導仮設を立てる。
	（手だて）	・実態把握表を作成し、児童・生徒の課題を整理する。 ・児童・生徒が困難と感じている課題１～２つに目を向け、ケーススタディの中で、指導仮説を立てることができるようにする。 ・授業観察した外部専門員から、指導及び助言を受け、授業改善を行っていく。

ポイント３　児童・生徒一人一人の生活の質が向上する自立活動の指導		
	（背景）	自立活動の指導の充実という視点から、流れ図の作成を通して実態把握を行い、指導目標と指導内容について考えていく。
	（目標）	QOL の向上につながる自立活動の授業づくり
	（手だて）	・縦割りグループに分かれ、小・中・高のケース児童・生徒を挙げ、流れ図を作成し、指導内容について意見を出し合う。 ・外部専門員の助言を受けながら、ケース児童・生徒の指導仮説を立て、授業改善を行い指導内容について検証する。

ポイント１　児童・生徒の実態把握

図表８　ファーストシート



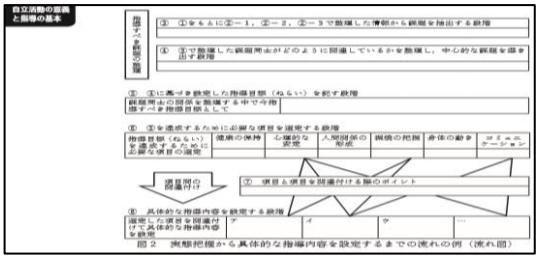
2 情報を整理しよう		
気になることを書き出す（思いつくままに）		
気になることに順位づけをしよう	1	2
	3	4
	5	6

児童・生徒の実態や困り感、課題として捉えていることを知り、共有するために認知発達段階を考える手立てとしてファーストシートの作成を行った。

ファーストシートで見えた課題や仮説を基に、実態把握を継続しながら、外部専門員の助言を受けて授業改善を行った。

ポイント２　重度・重複障害のある児童・生徒のための授業づくり

図表９　流れ図



QOL の評価方法として、流れ図（実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れ）を作成し、「自立活動」での目標と指導内容を設定した。

流れ図を基に、指導内容について日々の授業の中で検証し、学習グループごとに一単元研究授業を行い、授業改善を行った。

ポイント３　児童・生徒一人一人の生活の質が向上する自立活動の指導

図表 10　感覚のチェックリスト表

	✔	活用する感覚	具体的にどのようなことを工夫して感覚に働きかけていくか
感覚に働きかける授業作り		前庭感覚	
		固有感覚	
		触覚	
		視覚	
		聴覚	
		嗅覚	

各学習グループで、自立活動「環境の把握」について工夫した授業づくり又は、児童・生徒の意思表出につながる活動の工夫というテーマから 1 つを選択し、チェックリストを活用して進めた。

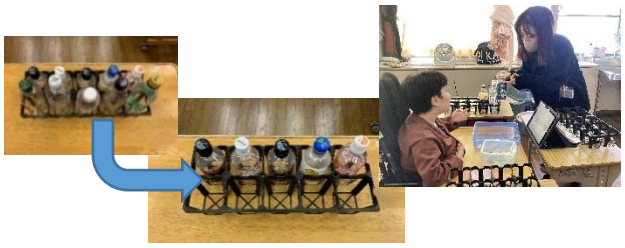
外部専門員の助言を受けながら、教員の関わり方や言葉掛け、学習に取り組む姿勢づくりも環境の把握の重要な視点であることに気付きながら、授業改善を行った。

2　Ａ部門　知的代替の教育課程　研究グループ

ポイント１　実態把握を土台とした個別に応じた授業実践の試行	
（背景）	授業改善に関するアンケートより、児童・生徒の発達段階・既習事項などを的確に把握することが課題であると挙がった。その意見を踏まえて、アセスメントを活用した実態把握を学ぶ、授業づくりについて検討することにした。
（目標）	・アセスメント（小中学部はファーストシート、高等部はTTAP）を活用して実態把握を行い、指導で困っていること等を明確にし、それにアプローチした授業づくりを試みる。
（手だて）	・ファーストシート（小中学部）やTTAP （高等部）ついて学び、児童・生徒の適切な実態把握をするための手段を増やす。 ・小中高の縦割りで研究会を進めることで、学部を超えた教職員での意見交換の場を設ける。そして、指導上の悩みを共有し課題解決のヒントを得る。

ポイント２　児童・生徒の自己効力感を育てるための指導～学びに応じた個別課題の設定について～	
（背景）	令和３年度の反省より、児童・生徒の実態を把握し、その実態や発達段階に合った課題や教材の精選が難しいという意見があがった。その意見を踏まえて、児童・生徒の QOL を向上させる学校の一要因である自己効力感を育てるために指導について検討することとした。
（目標）	・教授（教員－生徒－教材）の３項関係での学びを通じて、個別課題の狙いに準じた学習を試行錯誤する。
（手だて）	・教員間で情報共有をし、どのような困り感があるか、どのような手立てが有効かについて検討をし、授業改善のヒントにする。 ・外部専門員を活用し、児童・生徒の個別課題やその教材について助言を受け、改善につなげる。 ・ＱＯＬの向上の視点から、実践を振り返り、効果を検証する。 ・東京型教育モデルとのつながりを検証し、効果を測定する。

ポイント３　児童・生徒に適した学習環境の工夫と共有～ICT 機器・教材の活用、教員の関り方～	
（背景）	令和４年度は、児童・生徒の実態を知ることができ、指導に生かし、①共有することのできるアセスメントを学ぶこと。②学習環境を整えることで、児童・生徒の成長を促すことの２つの学ぶことができた。それらを踏まえ、児童・生徒に適した学習環境を模索しながら、教員一人一人の児童・生徒の実態把握力及びその理解を授業づくりや授業改善に活かす基本を学べるように進めることとした。
（目標）	・教員一人一人が、児童・生徒の見立ての基本を学び、児童・生徒に適した学習環境を工夫する考え方を学ぶ。
（手だて）	・児童生徒の実態把握の基本的な考え方を学び、授業づくりや改善につなげる。 ・児童生徒に適した学習環境を工夫し、その影響を検証していく。 ・外部専門員を活用し、授業づくりや就労に向けた助言を受ける。そして、それらを授業改善に活かす。

ポイント１　実態把握を土台とした個別に応じた授業実践の試行	
行動観察と太田ステージ評価を参照し児童理解を深めた。身近な魚を題材に「大きい、小さい」の学習に取り組んだ。段ボール製の魚を用意し、大きい魚を重くすることで、大小の差異を体感できるようにした。魚は捕りやすいように、机からはみ出すように置く工夫をした。	就労アセスメント「TTAP」の外部専門家を招き、作業学習を行った。「TTAP」の結果より、作業への正確・責任性の課題が見られた。担当する作業工程を絞り、道具を改良し、本人の作業への取り組み状態を見直しながら、授業改善に取り組んだ。
ポイント２　児童・生徒の自己効力感を育てるための指導～学びに応じた個別課題の設定について～	
	
援助依頼をすることに課題ある生徒に、「お願いします」という依頼カードを用いた支援を試みた。依頼カードを使うことで、「これならできそう」とわかり、自信をもって依頼するようになった。そして、徐々にカードから言葉での依頼へとつなぐ足場を整えることで、カードを用いず、言葉での依頼が増えてきた。	「TTAP」の結果から、活動を持続的に遂行しようとする姿勢が本人の強みであることを再確認した。その強みを生かし、作業中の指示を理解しやすくするために、言葉掛けを少なくし、他の生徒と関わり、リラックスできる環境づくりをした。その結果、本人の表情が緩み、ペットボトルを弁別する動きの精度が上がった。
ポイント３　児童・生徒に適した学習環境の工夫と共有～ICT 機器・教材の活用、教員の関り方～	
児童の興味関心を引き出すために、タブレット端末のアプリケーションを使用した。正解するごとに音が鳴るなどのリアクションがあり、喜ぶ様子が見られた。また、自主的にタブレット端末を出して学習に取り組むなど、授業への姿勢にも変化が見られるようになった。	「TTAP」の結果を踏まえ、グループ会で、生徒に適した教材（角丸、カット台）について検討した。検討した内容を、夏季授業改善研究会で発表した。学部内で「TTAP」の見方を共有し、生徒に適した教材について協議をし、検討できた。

３　Ａ部門　準ずる教育課程　研究グループ

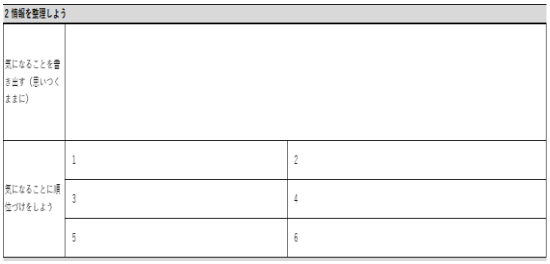
ポイント１　児童・生徒の得意なところを生かし、苦手なところに配慮する指導の工夫	
（背景）	授業改善に関する校内アンケートの結果から、授業で、主体的・対話的で深い学びの場面を設定することが課題になっていることが明らかになった。
（目標）	アセスメントを活用して実態把握を行い、児童・生徒の得意なところを生かし、苦手なところに配慮する指導の工夫を行い、教科の学びを深める。
（手だて）	・WISC-IV 知能検査の読み解き方や、教員自身で実施できる「読み書きアセスメント」活用の方法について学び、児童・生徒の適切な実態把握をするための手段を増やす。 ・小中高の縦割りで月１回の研究を進めることで、小学部段階から卒業後の生活を意識して、情報共有をして授業改善を進める。

ポイント２　ＩＣＴ機器や支援ツールを活用した個別最適な教科指導の充実	
（背景）	研究１年目は、アセスメントを活用した実態把握に基づき、指導仮説を立て、授業改善に取り組んだ。２年目は、適切な実態把握を土台として、ＩＣＴ機器を活用して、児童・生徒の身体面の困難さに配慮した指導の工夫を進め、個別最適な学びを目指す。
（目標）	ＩＣＴ機器や支援ツールを活用した授業改善を通して、児童・生徒の学習意欲を向上させ、深い学びを実現する。
（手だて）	・教員間で情報共有をし、どのような困り感があるか、どのような手立てが有効かについて検討をし、指導仮説を立てる。 ・外部専門員を活用し、授業についてや児童・生徒のデジタル機器の活用について助言を受け、改善につなげる。 ・ＱＯＬの向上の視点から、実践を振り返り、効果を検証する。

ポイント３　デジタル教科書とデジタル教材の活用スキルの向上と基礎的な授業力の向上	
（背景）	研究２年目は、児童・生徒のＱＯＬの向上につながった事例を共有して、ケース検討を進めた。日々の授業が、着実に児童・生徒のＱＯＬの向上につながっていることが明らかになった。令和４年度のデジタル教科書とデジタル教材を活用したアンケート結果から、デジタルはツールであり、その活用と並行して、基礎となる授業力の向上も必要となることが課題として指摘された。
（目標）	教員のデジタル教科書とデジタル教材の活用スキルの向上と併せた、基礎的な授業力の向上から、児童・生徒の学習意欲を向上させ、深い学びを実現する。
（手だて）	・授業前に指導案検討を実施し、より良いデジタル教材、デジタル教科書の活用方法、発問等の授業の基礎となる点について意見交換を実施する。 ・実践事例を共有し、デジタル教材、教科書を活用した、教員の授業スキルを向上し、授業改善につなげる。 ・外部専門員を活用し、授業についてや児童・生徒のデジタル機器の活用について助言を受け、改善につなげる。

ポイント１　児童・生徒の得意なところを生かし、苦手なところに配慮する指導の工夫

図表 12　ファーストシート



2 情報を整理しよう		
気になることを書き出す（思いつくままに）		
気になることに順位づけをしよう	1	2
	3	4
	5	6

児童・生徒の実態、課題や発達段階を整理するために、ファーストシートを作成した。その他のアセスメント結果も活用し指導仮説を立て、授業改善に取り組んだ。

WISC-Ⅳの結果について、その意味と活用方法を学んだ。また、教員が実施できる「読み書きアセスメント」（都教委）ソフトの使い方について学び、生徒・児童の適切な実態把握をするための手段を増やすことができた。

ポイント２　ＩＣＴ機器や支援ツールを活用した個別最適な教科指導の充実

手指の力の弱さや、手腕に拘縮の麻痺があるなど、身体的な特性により、図形作画や消しゴムで消す作業など筆記に困難さがある児童・生徒に対して、Class Notebook を導入した。身体面の困難さを軽減したことで効率よく書字が可能となり、学習内容に注力できるようになった。

スマートフォンの機能を使い、文字の読み上げ機能で、コミュニケーションをとれるようにした。自ら様々な手段を使用して身近な教師や友達とやりとりをしようとしたり、場面にふさわしい言葉を使おうとしたりする様子が見られるようになった。

ポイント３　デジタル教科書とデジタル教材の活用スキルの向上と基礎的な授業力の向上

図表 13　幸せの１番星

Class Notebook の Collaboration Space を活用し、5 名の生徒が、チャットの感覚で同時に意見を出し合う活動を行った。他の生徒が出した意見を基に発言したり、自分の考えをさらに深めたりすることができ、主体的で深い学びへつなげることができた。

３ヒントクイズを作る、おうちの方へ一行日記を書くなど段階的に伝える経験を積み重ねてきた。好きな教科を伝える活動では、ビデオレターを作成した。カードを並べて話す順序やつなぎ言葉を考えたり、動画で内容や声の大きさ、速さなどを見返したりしながら、相手に伝わるように話す方法を主体的に考えることができた。

４　Ｂ部門　小学部　研究グループ

ポイント１　ルーブリック評価を活用した評価規準の作成	
（背景）	学部アンケートの結果から集団学習における児童の実態差が課題となっていたため。
（目標）	児童一人一人の実態把握を行い、授業の単元において何を身につけさせたいかを明確に設定し、確実に評価していく。
（手だて）	・ルーブリック評価を活用し、児童一人一人の課題に合わせて単元での到達目標を設定した。そして、抽出児童における当該単元内の始まりと終わりに到達度を評価する。 ・教員が一人一回の研究授業を行い、指導と評価の一体化をもとに個別最適な学習の提供の振り返りとともに効果測定を行う。 ・MT と ST で児童の情報共有をし、活動内容やより良い手立て、方策を検討し、授業改善を図る。 ・授業を観察した外部専門員から指導及び助言を受け、授業改善を行っていく。

ポイント２　WHO QOL 26 をもとに授業内 QOL のチェック項目の作成	
（背景）	ＱＯＬの向上にあたり、授業とＱＯＬの関連性が不明確であることが課題となったため。
（目標）	児童一人一人の授業内の QOL の向上を目指す。
（手だて）	・授業内における QOL のチェック項目を明確にして、授業内の QOL としての評価項目を外部専門員に助言を受けて策定した。それにより、授業内容だけでなく授業環境等にも着目し、質的な向上を図る。その上で、抽出児童における当該単元内の始まりと終わりに上記のチェックの項目を明記して、効果を測定する。 ・MT と ST で抽出児童の情報共有をし、活動内容やより良い手立て、方策を検討し、授業改善を図る。 ・授業を外部専門員から指導及び助言を受け、授業改善を行っていく。 ・東京型教育モデルとの繋がりを検証し、効果測定を行う。

ポイント３　意欲を引き出す学びのための授業作り	
（背景）	東京都教育型モデルの１つである「意欲」に焦点化した実践が必要である。
（目標）	児童の意欲を引き出し、主体的に学習に取り組む態度を培う。
（手だて）	・前年度までのルーブリック評価と授業内の QOL の測定を継続して行う。 ・東京型教育モデルの１つである「児童の意欲」の面に焦点を当てた授業実践を行う。具体的には、抽出児童の興味関心、好きな活動等を明確にして、それらを教材や授業内容に生かした実践を行う。 ・MT と ST で抽出児童の情報共有をし、活動内容やより良い手立て、方策を検討し、授業改善を図る。また、ST が教材作成などにも参画し、協同した授業実践を行う。 ・授業を外部専門員から指導及び助言を受け、授業改善を行っていく。

ポイント１　ルーブリック評価を活用した評価規準の作成

図表 14 ルーブリック評価表

国語科　ルーブリック評価表	学年、グループ		
3観点	知識・技能 「何を知っているか、何ができるか」	思考力・判断力・表現力 「知っていること・できることをどう使うか」	学びに向かう力・人間性 「主体的に学習に取り組む態度」 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」
	よくわかり、よくできる	わかったことをよく使える	よく関り、よく生きる
題材 「１からうまでの数」 （授業で行っている題材一つについて）	題材の目標		
	第１からうまでの題材で、基礎的な数を理解できるように、数を数えることができるようにする。	具体的な人形を実際に事例に入れて、人形と数字の数の関係ったことに気が付き、自分で問題を立てることができる。	提示された手順をやり方で進める。
	第１からうまでの題材で、基礎的な数を理解できるように、数を数えることができるようにする。	具体的な人形を実際に事例に入れて、人形と数字の数の関係ったことに気が付く。	活動の様子を受け入れることができる。
	第１からうまでの題材で、ばくにある数字の数を数で数えるように、人形の数を数に入れて作ってくる。	具体的な人形を実際に事例に入れて、人形と数字の数があっていることがわかる。	活動に指定された数を数えることができる。（あるだけ入れたり、好きなだけ数えたりしない。）
	第１からうまでの題材で、ばくにある数字の数を数で数えるように、人形の数を数に入れて作ってくるのが難しい。	具体的な人形を実際に事例に入れて、人形と数字の数があっていることがわからない。	活動に指定された数を数えることができない。（あるだけ入れたり、好きなだけ数えたりしない。）
対象児童の実現状態			
対象児童の最終状態			
教材・工夫点			

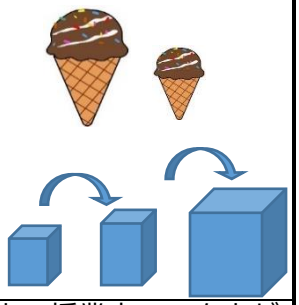
児童の課題に応じた目標設定と確実に評価する授業づくりをテーマとし、３観点で段階的に目標を設定するルーブリック評価表を作成した。児童の次の段階を意識してスモールステップで指導することができた。単元の終了後に再度、評価を行うことで、教師の指導や学習内容における評価も行うことができた。

３観点で目標を設定したことで、特に学びに向かう力・人間性を伸ばしていくにはどのような工夫が必要か課題となった。その上で、児童が主体的に学習活動に取り組むことができるような教材作りを行った。そして、グループごとの教材を研究会で紹介し合い、共有することができた。

ポイント２　WHO QOL 26 をもとに授業内 QOL のチェック項目の作成

図表 15 授業内 QOL のチェック項目
（cf: WHO QOL26）

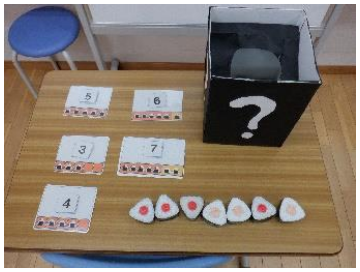
	身体的ＱＯＬ	初	終	社会的ＱＯＬ	初	終
ＱＯＬ	・体の不快感(熱や痛みなど)なく活動できた ・睡眠を十分にとれた状態で活動できた （その他　　）			・発表できた ・ほめられた ・友達や教師と一緒に活動できた （その他　　）		
	心理的ＱＯＬ	初	終	環境的ＱＯＬ	初	終
	・楽しく活動できた ・集中して活動できた ・達成感を得ることができた(満足そうな表情が見られた) （その他　　）			・集中できる教室で活動できた。 ・適切な教師の支援を受けて活動できた。 ・見通しをもって活動できた。 （その他　　）		○

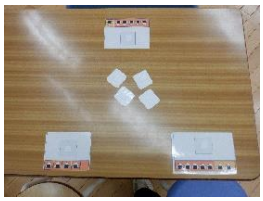


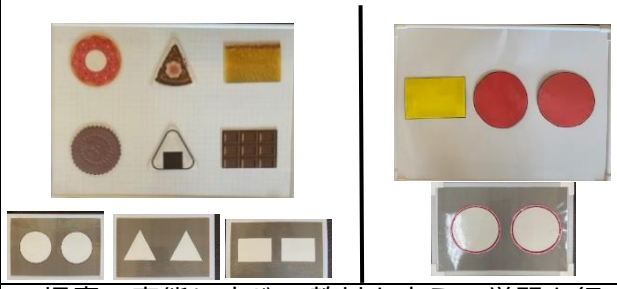
「仲間集めをしよう」を行い、具体物や写真、イラストを用い、児童の発達段階に応じた教材を使って弁別を行った。授業内 QOL を作成し、それを用いることで、児童の体調や授業時の気温などに応じて、衣服や空調の調整など、学習環境を整えることも重要であることが改めて実感できた。授業は学習内容だけでなく、児童の体調、教室環境を含めた支援の必要性が明確になった。

QOL のチェック項目の中で授業内での向上が見られる「教師の適切な支援」や「見通し」に焦点を当て、教材や指導内容の工夫を行った。単元の始めでは、大きさの違いが明確に分かるカードを使用した。また、正解したことが分かるように大きさの順番に箱を積んだり、入れたりする課題を設定した。単元の終わりには、児童の環境的 QOL が向上し、QOL の視点からも教師の支援方法や教材の工夫が大切だと改めて感じた。

ポイント３　意欲を引き出す学びのための授業づくり







児童の「話すことが好き」「友達と関わることが好き」という意欲を引き出し、「かずあつめ」を題材に学習を行った。教材をとおして友達とやりとりすることで、社会的・心理的 QOL が概ね高かった。活動がリレーションを高め、より高次な活動へと繋がり、QOL の質的向上が推察できた。

児童の実態に応じて教材を変えて学習を行った。児童が好きな食べ物カードを用い、それらと同じ形を選択し、手元用ボードに貼り付ける課題を設定した。一部の児童には選択肢を減らし、手元用ボードの枠線を強調した。児童の意欲や実態に合った教材を作成したことで成功体験を積み、学習目標の達成につなげることができた。

5　B部門　中学部　研究グループ

ポイント１　生徒が主体的に学習できるために「分かる」授業を作る	
（背景）	生徒が自分で学習することを理解し、自らすすんで行動できるようになることが求められる。
（目標）	生徒の主体的（対話的）な深い学びを実現する
（手だて）	・生徒が学習すること、指示の内容、何をどこにどうするのかなどを理解できる授業づくりをする。 ・構造化、視覚支援の有効活用をキーワードに授業改善をする(安斉先生の助言より)。

ポイント２　生徒が考え、伝えることのできる授業を作る	
（背景）	自分の気持ちを言葉や選択肢などを用いて表現することが必要である。
（目標）	生徒が自分の内側にある気持ちや考えを表現できる
（手だて）	・生徒の気持ちを汲み取り、表出に教師が理由をのせる。選択肢の具体化（理由など細かい部分を選択できるようにする）、思考の視覚化などの方法で授業改善をする。 ・研究授業を教員同士で見合い、課題の共有をできるようにする。

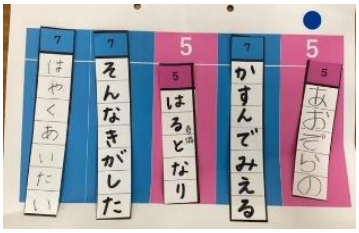
ポイント３　生徒の実態や課題を適切に把握したうえで、生徒が伝えることのできる授業を作る	
（背景）	多感な中学生という時期に学習の充実を目指すには思春期段階の生徒の指導についての共通認識が必要である。
（目標）	生徒の障害特性に合わせて、発達段階（思春期段階）の特性を理解する。
（手だて）	・外部専門家の助言を日常的な指導に生かす。 ・生徒の心身の成長の様子について、随時共通理解を図り指導に活かす。 ・障害特性と年齢を客観的にとらえながら、実態に合わせた個別最適な教材と課題を設定する。

ポイント１　生徒が主体的に学習できるために「分かる」授業を作る

「数学：『分かる』を実感できる工夫」
・【昨日/今日/明日】が色分けされた枠で表示されているため、色のマッチングから昨日、今日、明日を理解することができる。
・教師が正解というのではなく自分で正解を認定できるおもしろさがある。すぐに答え合わせができるところがよい。主体性を育む好事例となった。

「作業学習：やるべきことが分かる工夫」
・箱の中を見ると自分の作業内容が分かり、見通しをもって取り組むことができる。
・個々のできることを組み合わせたライン作業を確立し、自分の作業内容が隣につながる実感を伴い意欲と主体性をもって取り組む姿が見られた。

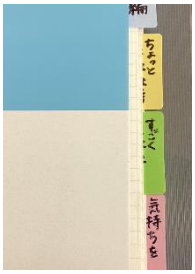
ポイント２　生徒が考え、伝えることのできる授業を作る

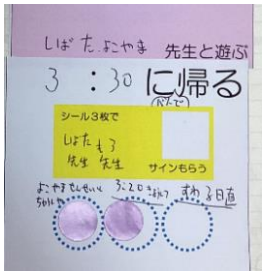


「国語：５７５７７ゲームを使って短歌を作ろう」
・思考ツールを用いて冬のイメージを単語で共有する。５音７音に合わせて言葉をカードにする。組み合わせて５７５７７の短歌にする。
・色分けされているところにカードを置き必然と短歌を作ることができる。自分で言葉を出しにくい生徒もやり取りの中で考えて言葉を選ぶことができる。
・できたものをお互いに書いたり読んだりして伝えることができる。

「個別学習：実態差にアプローチ」
・量や大きさ等の概念を視覚化・体感できる教材は、実態差の大きい集団において個々のもてる力の涵養・意欲の向上・待ち時間の軽減につながった。
・日々の個別学習の時間に、クラス単位で継続して取り組んだことも効果的だった。

ポイント３　生徒の実態や課題を適切に把握したうえで、生徒が伝えることのできる授業を作る





「学校生活全般：思春期段階において自分らしく成長する→自己調整力向上→QOL 向上」
・自分の体調を把握して気持ちを伝えられるようになってほしいという願いがある。
　【登校カード/授業の即時評価/目標の設定/休憩チケット】
・進学に向けて自分のことをノートにまとめる。
・小さな目標を設定し、行動を細分化して即時評価する。指導の方法を教員間で共有し活用する。

6　Ｂ部門　高等部　研究グループ

ポイント１　外部専門員との連携	
（背景）	本校では外部専門員のアセスメントの機会が設けられているが、指導の体制上、担任がアセスメントに同席することができない実情がある。そのため、事前に指導上の困難さや生徒の課題を外部専門員に伝えた上でアセスメントを実施し、フィードバックへと繋げていくことが重要であると考え、目標を設定した。
（目標）	アセスメントのフィードバッグを的確に授業改善につなげる。
（手だて）	・即時フィードバッグの原則に基づき、動画等も活用して教員の情報共有を図る。 ・授業改善にすぐに生かせる具体的な助言を得る。

ポイント２　「QOL」への理解・啓発	
（背景）	研究活動２年目より、QOL 向上の視点が加わった。高等部段階の生徒にとってのQOL 向上とは何を指すのか、また、その QOL 向上のために学校は何ができるかを各教員が考え、意見交換を行うことが QOL 向上の実践に繋がると考え、理解・啓発に取り組んだ。
（目標）	「QOL」に親しみをもつ。
（手だて）	・アンケートの実施等で、教員生徒に「QOL」について触れる機会を設ける。 ・専門性のある講師の出前授業等で、QOL についての理解の向上を図る。

ポイント３　卒後の生活を見据えた指導の充実	
（背景）	高等部は社会生活の入り口へと導く役割を担っている。卒後の生活を意識した指導実践が求められていることから、実際に社会生活で求められるスキルや態度を具体的にイメージしながら「作業」の授業を通して研究実践を行った。
（目標）	・進路やキャリア教育の観点を意識した指導の充実を図る。 ・個別最適な学びの視点をもつ。
（手だて）	・外部専門員の助言等を活用する。 ・進路指導部との連携を図る。 ・保護者への理解・啓発を図る。 ・「作業」の授業にて研究実践を図る。

ポイント１　外部専門員との連携

図表 16 ケース相談票

助言者		ケース検討日	R　年　月　日
児童・生徒名		学部・学年	高等部　年　組
障害名・手帳	愛の手帳　　度		
実態			
教師のウオンツ			
主訴 現在困っている行動 （いつから、頻度等、具体的に）			
その他（主訴のほかに、助言をお願いしたいこと）			

作業学習グループごとにケース生徒を決定し、年に３回、外部専門員から助言を受けた。講演会形式や即日フィードバックにより、具体的な授業改善へと繋げることができた。

生徒の適切な課題把握の方法や、個々に必要な支援をどのように授業全体への改善に繋げるか等のアドバイスをいただいた。その後、作業班ごとに授業の流れの見直しや環境整備、教材教具の開発を行った。

ポイント２　「QOL」への理解・啓発

図表 17 ＱＯＬアンケート

図表 18　学部研究アンケート自由記述欄

授業のねらいや目標に、QOL の視点からみるとどうか、という今までには考えることがあまりなかったことを考えるようになった。
主体的に取り組む姿勢を大切にしていこうと思っています。
授業をする際には取り入れていけるよう知見を深めたいと思います
職業を担当していて、定義を広くとると日常生活の質を上げることに行き着くので、服の畳み方や言葉遣いなど、日常的なつまずきを多く取り上げて指導に生かしています。
生徒が心理的に安定して授業に参加できるように視覚的な支援を取り入れました。
生活に根差した数学の知識を身に着けられるように心がけて行いました。
ICT を用いて自分でできるという経験をさせることができたので。
生徒の卒後の楽しみとして授業を考えるようになった。
参考になったので
卒業後の生活について「働く」だけではなく、「自分らしく生きる」という視点からも指導ができたと思います。
生活の中に授業で行ったことを取り入れたり、生活の中から、授業に取り入れやすい題材を見つけたり、工夫を行った。

２年目は全員に、３年目はケース生徒を対象にＱＯＬアンケートを実施した。年２回実施を行い、数値化及びグラフ化することで生徒の変容を読み取り、生徒のＱＯＬ向上に何が必要なのか、検討することができた。

ＱＯＬという言葉が何を意味し、何を指すのか、意見交換を行った。そこから、学校教育におけるＱＯＬとは何か、目指すべきＱＯＬとは何か、という一定の方向性を見出すことができた。

ポイント３　卒後の生活を見据えた指導の充実

実際に福祉事業所をもつ外部専門員から、卒後、どのような力が求められるかという視点で講演会を行っていただいた。現場の声に直に触れることで、高等部段階で求められるスキルについての共通理解を図ることができた。

キャリア教育においては、個別最適な学びの視点が欠かせないというアドバイスから、実態に応じたスケジュール表の導入を行った。自らスケジュールを確認することにより、自己の行動を調整できるようになった生徒が増える等の成果が見られた。

Ⅱ　資料

P 17/21　図表８/12　ファーストシート

2 情報を整理しよう		
気になることを書き出す（思いつくままに）		
気になることに順位づけをしよう	1	2
	3	4
	5	6

P 17　図表９　流れ図

自立活動の実態把握から目標設定までの流れ

STEP1 実態把握

学年・組・氏名	A小学部　　第　　学年				
障害の種類・程度や状態等					
① **情報の収集の段階**（障害の状態，発達や経験の程度，興味・関心，学習や生活の中で見られる長所やよさ，課題等）					
実態把握（6 区分すべて記入する必要はありません。）					
健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション

STEP2 課題の整理と目標設定

②　－２　　収集した情報（①）を **１年後、３年後の姿の観点から整理する段階**
１年後 ３年後 **★③中心課題を導き出す段階** （　　月　日、　月　日　　課題関連図の作成によるケース会　）
④ **指導目標を記す段階**
③を達成するために**必要な項目を選定する段階**（学習指導要領の目標から）

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション

STEP3 日々の指導内容の設定と授業

⑤ **具体的な指導内容を設定する段階** （学期ごとに達成できる目標および手立てを記入する）			
目標と手立て			
関連する教科			

P 17　図表 10　感覚のチェックリスト

	✔	活用する感覚	具体的にどのようなことを工夫して感覚に働きかけていくか
感覚に働きかける授業作り		前庭感覚	
		固有感覚	
		触覚	
		視覚	
		聴覚	
		嗅覚	

P21　図表 13　幸せの 1 番星

P 23　図表 14　ルーブリック評価表

国語算数　ルーブリック評価表　　学年、グループ			
3観点	**知識・技能** 「何を知っているか、何ができるか」	**思考力・判断力・表現力** 「知っていること・できることをどう使うか」	**学びに向かう力・人間性** 「主体的に学習に取り組む態度」 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」
	よくわかり、よくできる	**わかったことをよく使える**	**よく関り、よく生きる**
題材 「1から5までの数」 （授業で行っている題材一つについて）	**題材の目標**		
	Ⓢ1から5まで数で車両数の数字だけを見て、それに合う人形の数を籠に入れて持ってくる。	Ⓢ数えた人形を実際に車両に入れて、人形と車両の数が間違ったことに気が付き、自分で間違いを正すことができる。	Ⓢ提示された手順をやり方で進める。
	Ⓐ1から5までの数で、車両の数を見て確かめながら人形の数を籠に入れて持ってくる。	Ⓐ数えた人形を実際に車両に入れて、人形と車両の数が間違ったことに気が付く。	Ⓐ教師の修正を受け入れることができる。
	Ⓑ1から3までの数で、近くにある車両の数を見て確かめながら人形の数を籠に入れて持ってくる。	Ⓑ数えた人形を実際に車両に入れて、人形と車両の数があっていることがわかる。	Ⓑ教師に指定された数を数えることができる。（あるだけ入れたり、好きなだけ数えたりしない。）
	Ⓒ1から3までの数で、近くにある車両の数を見て確かめながら人形の数を籠に入れて持ってくるのが難しい。	Ⓒ数えた人形を実際に車両に入れて、人形と車両の数があっていることがわからない。	Ⓒ教師に指定された数を数えることができない。（あるだけ入れたり、好きなだけ数えたりしない。）
対象児童の初期段階			
対象児童の最終段階			
教材・工夫点			

P 23　図表 15　授業内ＱＯＬチェック項目（cf:WHO QOL26）

ＱＯＬ	身体的ＱＯＬ	初	終	社会的ＱＯＬ	初	終
	・体の不快感(熱や痛みなど)なく活動できた ・睡眠を十分にとれた状態で活動できた			・発表できた ・ほめられた ・友達や教師と一緒に活動できた		
	(その他　　)			(その他　　)		
	心理的ＱＯＬ	初	終	環境的ＱＯＬ	初	終
	・楽しく活動できた ・集中して活動できた			・集中できる教室で活動できた。 ・適切な教師の支援を受けて活動できた。		
	・達成感を得ることができた(満足そうな表情が見られた)			・見通しをもって活動できた。		○
	(その他　　)			(その他　　)		

P27　図表 16　ケース相談票

ケース相談票　　資料作成者（　　）

助言者		ケース検討日	R　年　月　日
児童・生徒名		学部・学年	高等部　年　組
障害名・手帳	愛の手帳　　度		
実態			
教師のウオンツ			
主訴 現在困っている行動 （いつから、頻度等、具体的に）			
その他（主訴のほかに、助言をお願いしたいこと）			

P 27　図表 17　 QOL アンケート

知的障害教育部門高等部 QOL アンケート

※担当する生徒について回答してください。対象の生徒氏名（　　）

項目番号	領域	質問項目	回答（○を　つけて　ください）
Q1	身体的領域	頭痛や腹痛を訴えることはありますか？	ない　　ときどき　　いつも
Q2	身体的領域	疲れてぐったりしていることはありますか？	ない　　ときどき　　いつも
Q3	心理的領域	つまらないと感じている様子を見せることはありますか？	ない　　ときどき　　いつも
Q4	心理的領域	家でけんかになるという話を聞くことはありますか？	ない　　ときどき　　いつも
Q5	身体的領域	元気に学校生活を過ごしていますか？	ない　　ときどき　　いつも
Q6	心理的領域	たくさん笑っていますか？	ない　　ときどき　　いつも
Q7	心理的領域	本人は自分のことを何でもできると感じていますか？	ない　　ときどき　　いつも
Q8	心理的領域	本人は自分のことを好きだと思っていますか？	ない　　ときどき　　いつも
Q9	社会的領域	家族（もしくは施設職員）と仲が良いですか？	ない　　ときどき　　いつも
Q10	社会的領域	友達と仲が良いですか？	ない　　ときどき　　いつも
Q11	社会的領域	友達と協力して活動に参加することができていますか？	ない　　ときどき　　いつも
Q12	心理的領域	授業をよくわかっていますか？	ない　　ときどき　　いつも
Q13	心理的領域	授業が楽しいと思っている様子はありますか？	ない　　ときどき　　いつも
Q14		将来どんな仕事をしたいと考えていますか？	
Q15		将来休みの日は何をしたいと話していますか？	

実施日…　　月　　日
回答者（　　）

Q1～Q4 いつも…0点　　ない…5点　　（ときどき…2点）
Q4～Q13 いつも…5点　　ない…0点　　（ときどき…2点）

P 27　図表 18 学部研究アンケート自由記述欄

授業のねらいや目標に、QOL の視点からみるとどうか、という今までには考えることがあまりなかったことを考えるようになった。
主体的に取り組む姿勢を大切にしていこうと思っています。
授業をする際には取り入れていけるよう知見を深めたいと思います
職業を担当していて、定義を広くとると日常生活の質を上げることに行き着くので、服の畳み方や言葉遣いなど、日常的なつまずきを多く取り上げて指導に生かしています。
生徒が心理的に安定して授業に参加できるように視覚的な支援を取り入れました。
生活に根差した数学の知識を身に着けられるように心がけて行いました。
ICT を用いて自分でできるという経験をさせることができたので。
生徒の卒後の楽しみとして授業を考えるようになった。
参考になったので
卒業後の生活について「働く」だけではなく、「自分らしく生きる」という視点からも指導ができたと思います。
生活の中に授業で行ったことを取り入れたり、生活の中から、授業に取り入れやすい題材を見つけたり、工夫を行った。

Ⅲ　引用・参考文献

・東京都教育委員会（2017）『読めた』『わかった』『できた』読み書きアセスメント活用＆支援マニュアル

・東京都教育委員会（2018）『読めた』『わかった』『できた』読み書きアセスメント活用＆支援マニュアル～中学校版～

・古荘純一,柴田玲子,根本芳子,松嵜くみ子（2014）子どもＱＯＬ尺度その理解と活用,診断と治療社

あとがき

副校長　永峯　秀人

令和３年度、本研究は、「ＱＯＬとはどのようなものだろうか」ということを教職員が共有することから始め、３年間をかけて授業及び教育課程改善へと進めて参りました。

本校の教職員は、研究授業、学部研究会、研究報告会で日頃に増して生き生きと活躍し、力を発揮してくれました。このことは、本校の強みの一つであると同時に、協力していただいた講師からの助言で「授業が変わった！」「子供が伸びた！」と実感した成果であると考えています。研究活動そのものが、教職員のＱＯＬを向上させているのかもしれません。

さて、本冊子は研究・研修部を中心にまとめ３年間の研究経過と成果及び課題です。まだまだ至らぬ点がたくさんございます。御意見等がございましたらお聞かせいただけますようお願いいたします。引き続き、日々の授業改善を繰り返し、授業研究を深めて参りたい所存です。

最後に、３年間の本研究に御助言をいただきました各学部の講師の皆様に改めて感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

編　集	東京都立府中けやきの森学園	研究研修部		
	主　任	山下 さつき		
	副主任	磯山 亜紀子		
	A 部門			
	自立活動研究グループ	堺　晴香	田中　沙紀	
	知的代替研究グループ	飯坂　良樹	齊藤　健夫	
	準ずる研究グループ	山川　葉子		
	B 部門			
	小学部研究グループ	上野　義昭	田村　実穂	
	中学部研究グループ	横山　鮎子	磯山 亜紀子	
	高等部研究グループ	大谷　直紀	篠宮　誠	高須　綾子
		緑川　由紀	和久田 真由	
発　行	東京都立府中けやきの森学園			
発行日	令和６年４月吉日			